

平成 27 年度 大阪府中学生チャレンジテスト 結果と分析（東大阪市）

平成 28 年 1 月 13 日に実施された「大阪府中学生チャレンジテスト」について、東大阪市の結果及び分析を公表します。

●調査結果について●

本調査で得られる結果は学力の特定の一部であることや、平均正答率のみでは生徒の学力については測ることができないことを踏まえ、本調査から得られたデータをもとに学校・家庭・地域が学力に関する課題を共有し、さらなる連携を深め、生徒の学力向上に取り組むことを目的として分析を行った。

●調査目的●（大阪府教育委員会作成の実施要領より）

- ①大阪府教育委員会が、府内における生徒の学力を把握・分析することにより、大阪の生徒の課題の改善に向けた教育施策及び教育の成果と課題を検証し、その改善を図る。
- ②市町村教育委員会や学校が、府内全体の状況との関係において、生徒の課題改善に向けた教育施策及び教育の成果と課題を検証し、その改善を図るとともに、そのような取組みを通じて、学力向上のための PDCA サイクルを確立する。
- ③学校が、生徒の学力を把握し、生徒への教育指導の改善を図る。
- ④生徒一人ひとりが、自らの学習到達状況を正しく理解することにより、自らの学力に目標を持ち、また、その向上への意欲を高める。
- ⑤大阪府教育委員会は、調査結果を活用し、大阪府公立高等学校入学者選抜における評定の公平性の担保に資する資料を作成し、市町村教育委員会及び学校に提供する。

●調査概要●

実 施 日	平成 28 年 1 月 13 日（水）
実施対象学年	中学校 1 年生 及び 2 年生
実 施 教 科	中学校 1 年生：国語・数学・英語 中学校 2 年生：国語・数学・英語・理科・社会
調査実施生徒数	中学校 1 年生 国語：3806 人 数学：3816 人 英語：3817 人 中学校 2 年生 国語：4003 人 数学：4016 人 英語：4022 人 理科：4023 人 社会：4030 人

※社会・理科は A・B からの選択問題となっている。社会 B 及び理科 B は、少数校選択であり、全体の分析結果には含まれていない。（実施人数には含んでいる。）

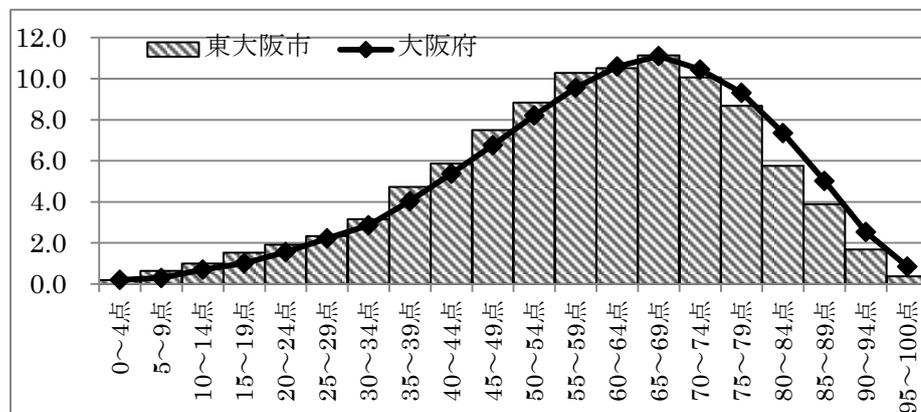
第1学年 国語

■平均得点

58.6点 (東大阪市)

61.0点 (大阪府)

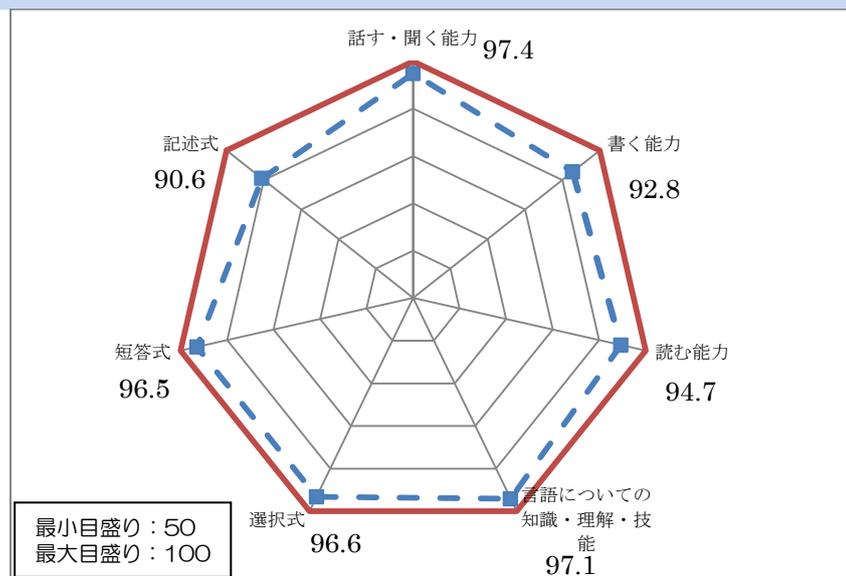
■得点別分布の割合



・65～69点をピークとする右寄りの山型となっている。

・府の分布と比較して、80点以上の生徒数の割合が少ない。

■領域別等の平均得点率のレーダーチャート (大阪府を100とした時の東大阪市の得点率)



・「話す・聞く能力」について、大阪府との開きが最も小さい。

・「書く能力」において、大阪府との差がやや大きい。

・「記述式」の設問において、低い得点率となっている。

■特徴的な傾向と対策

・「文脈に即して漢字を正しく書く，読む」設問では、6問中4問で大阪府の平均正答率を超えている。小学校で既習の漢字であり、その定着が一定図られているといえる。今後も読書習慣の向上を図る取組みなどを継続的に行っていくことが大切である。

・「「言いました」を適切な敬語に直す」設問は、全設問中で、大阪府との平均正答率の差が最も大きい（東大阪市 54.2% 大阪府 63.0%）。語句の意味を理解し、文脈の中で適切に使うことができるかどうかを問う他の設問でも開きが見られ、様々な場面で多様な表現に触れる機会を増やすことが大切である。

・「新聞記事のまとめとして条件に沿って自分の考えをまとめる」設問は、全設問中3番目に大阪府との開きが大きく（東大阪市 52.8% 大阪府 59.3%）、伝えたい事柄について、自分の考えを根拠を明確にして書くことに課題がある。より一層の「書くこと」の指導の充実が求められる。

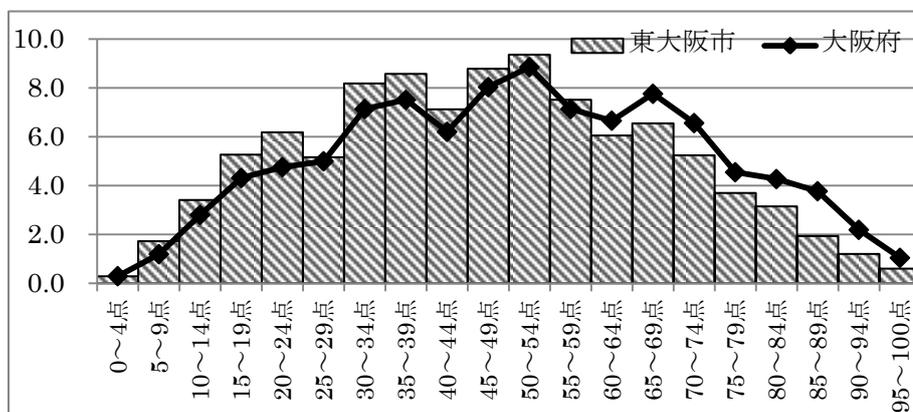
第1学年 数学

■平均得点

47.0点 (東大阪市)

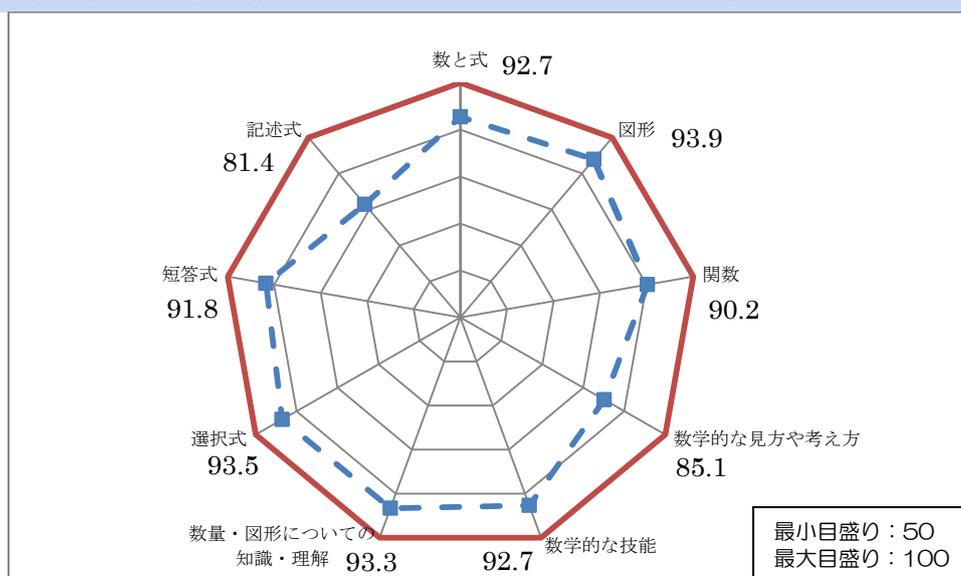
51.0点 (大阪府)

■得点別分布の割合



- ・50～54点をピークとする凸凹のある分布となっている。
- ・府の分布と比較して、60点以上の生徒の割合が少ない。

■領域別等の平均得点率のレーダーチャート (大阪府を100とした時の東大阪市の得点率)



- ・すべての観点等において、大阪府との開きが見られる。
- ・領域別では「図形」がもっとも府との差が小さく、「関数」での差が大きい。
- ・設問形式別では「記述式」の設問において府との差が大きい。

■特徴的な傾向と対策

- ・「1回目の点数が75点のとき、1回目の点数を基準として表したもののから5回の平均点を求める」設問は、全設問中で、大阪府との開きが最も大きい(東大阪市43.6% 大阪府52.6%)。仮平均を定め、平均を求めるなど、正の数と負の数を用いて、身の回りの様々な事象を表したり処理したりすることができるかどうかを問う設問であり、数学で学んだ知識を実生活の様々な場面で活用できるような工夫が求められる。
- ・「一次方程式 $2x-9 = -(x-3)$ を解く」設問は、全設問中2番目に大阪府との開きが大きい(東大阪市52.6% 大阪府59.6%)。簡単な一元一次方程式を解くことができるかどうかを問う設問であり、以降の学習の基礎となる力である。確実な定着を図る工夫がより一層求められる。

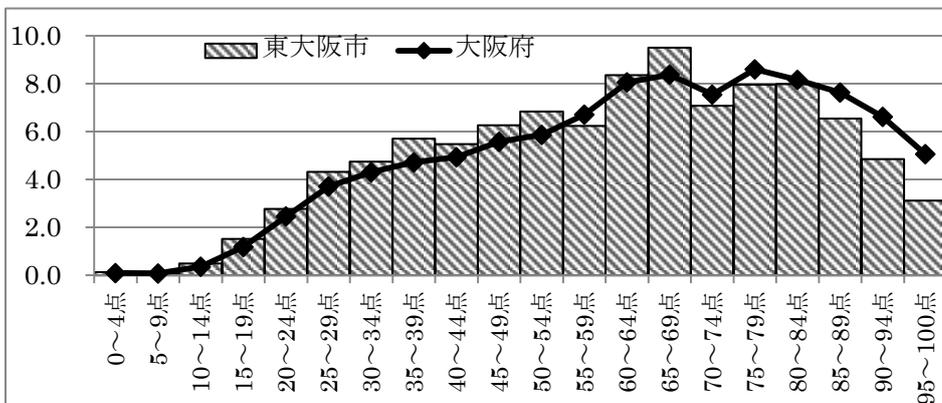
第1学年 英語

■平均得点

60.6 点 (東大阪市)

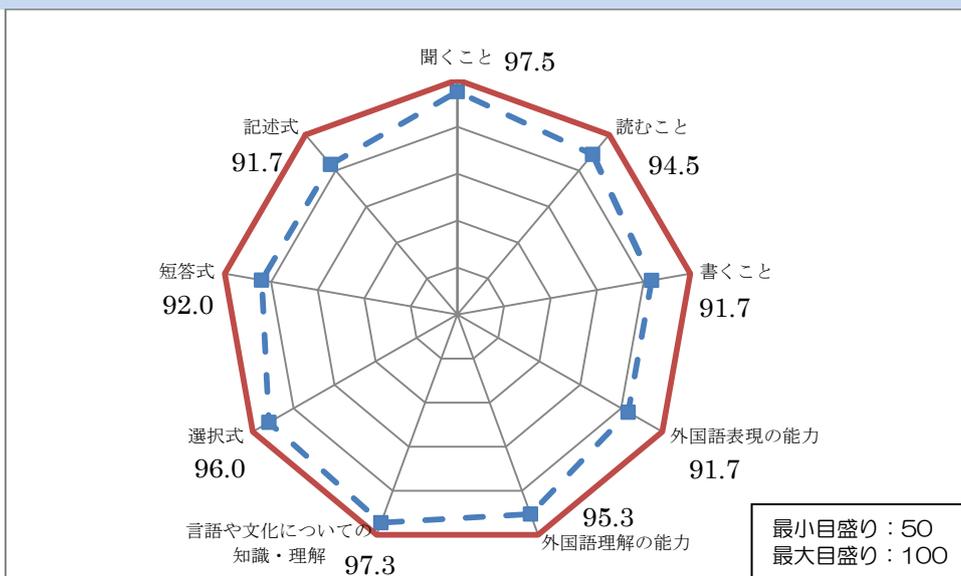
63.5 点 (大阪府)

■得点別分布の割合



- ・65～69 点をピークとする右よりの山型となっている。
- ・府の分布と比較して、85 点以上の生徒の割合が少ない。

■領域別等の平均得点率のレーダーチャート (大阪府を100とした時の東大阪市の得点率)



- ・「聞くこと」において大阪府との比較でほとんど差はない。
- ・「書くこと」「記述式設問」において、大阪府との開きがやや見られる。
- ・「言語や文化についての知識理解」は、比較的高い得点率となっている。

■特徴的な傾向と対策

- ・基本的な文の仕組みを理解しているかどうかを問う設問では、「適切な代名詞 (my) を選ぶ」(大阪府との差-3.0)「適切な be 動詞 (Are) を選ぶ」(大阪府との差-7.8)「適切な形容詞 (some) を選ぶ」(大阪府との差+10.8)「適切な助動詞 (does) を選ぶ」(大阪府との差-4.3)「適切な前置詞 (with) を選ぶ」(大阪府との差-4.1)で、定着のばらつきが見られる。基礎基本の確実な定着を図る取組みが求められる。
- ・「ウィルソン先生の話聞いて先生についての説明として正しいものを選ぶ」設問は、大阪府との平均正答率の差が最も大きい(東大阪市 32.3% 大阪府 43.9%)。話を聞き、内容を理解し要点を適切に把握しているかどうかを問う他の設問では、ほとんど差はないが、内容がやや複雑になると正答率が大きく下がることから、多様な場面、表現に触れることが重要である。

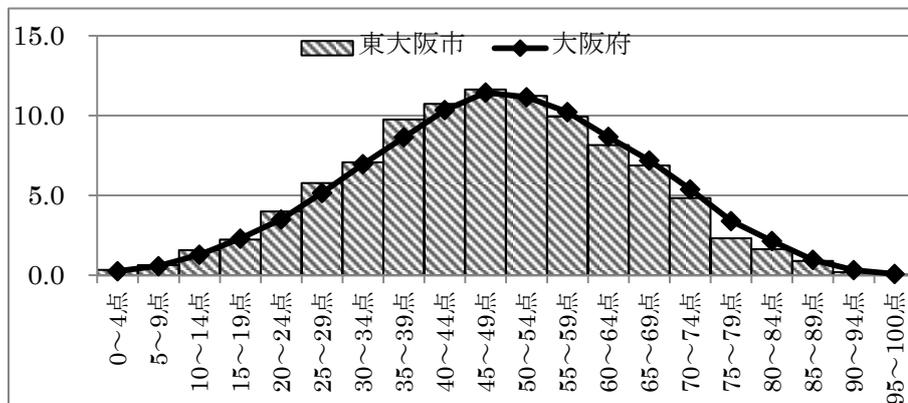
第2学年 国語

■平均得点

47.7点 (東大阪市)

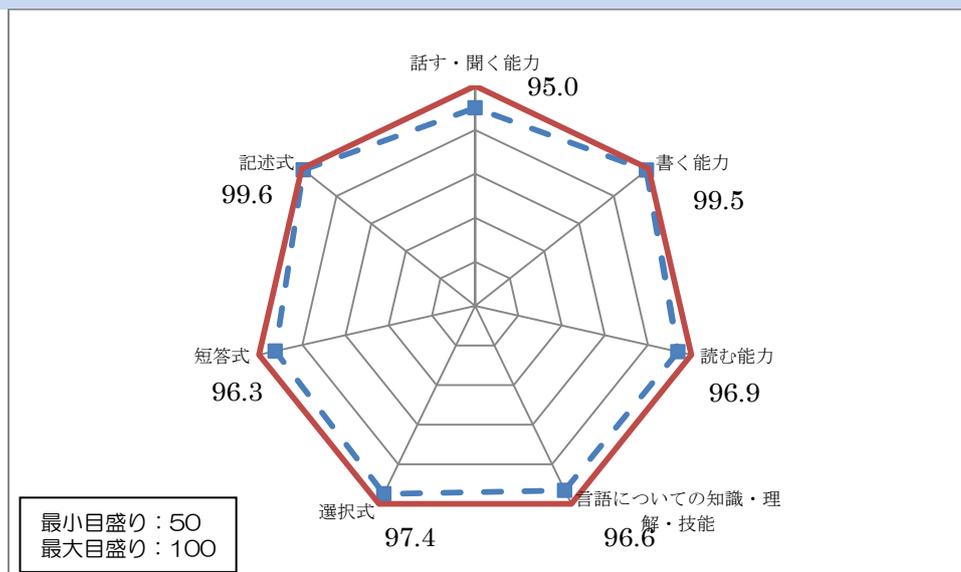
49.2点 (大阪府)

■得点別分布の割合



- ・45～49点をピークとする左右対称の山型となっている。
- ・府の分布とほぼ同じ状態である。

■領域別等の平均得点率のレーダーチャート (大阪府を100とした時の東大阪市の得点率)



- ・全体的に大阪府との差はほとんどない。
- ・「書く能力」「記述式設問」での得点率が高い値となっている。
- ・「話す・聞く能力」において他の観点等と比較して大阪府とやや開きがある。

■特徴的な傾向と対策

- ・文脈に即して漢字を正しく書く設問においては、「ギム (義務) づけられた」(府との差 -0.8)、「へらす (減らす)」(府との差 $+2.3$)、「インショウ (印象) に残りやすく」(府との差 -6.1) と設問によってばらつきが見られる。日常的な反復学習・家庭学習などにより、確実な定着を図ることが求められる。
- ・「生へたるやうなる」を現代かなづかいで書く (はえたるやうなる) 設問は、全設問中で最も大阪府との開きが大きく、文語のきまりにそって読むことに課題がある。授業の工夫と同時に、多様な表現の文章に触れる機会を増やすことが求められる。
- ・交通安全教室を開催するうえでのアイデアについて、話し合いの中に出ている「交通安全教室開催」の「良い点」に結び付け、自分の意見を明確にして書く設問は、正答率が9% (大阪府11%) で、極端に低く、自分の考えを具体的に書くことに課題がある。すべての教科等での「書くこと」の充実が求められる。

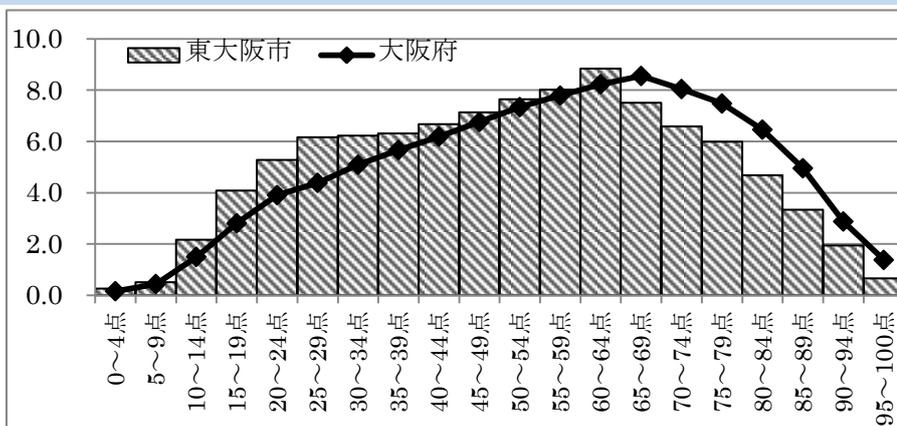
第2学年 社会 A

■平均得点

51.9 点 (東大阪市)

56.5 点 (大阪府)

■得点別分布の割合



- ・60～64点をピークとするなだらかな山型となっている。
- ・府の分布と比較して、65点以上の生徒の割合が少ない。

■領域別等の平均得点率のレーダーチャート (大阪府を100とした時の東大阪市の得点率)



- ・すべての観点等において、大阪府と比較すると、やや差が見られる。
- ・「記述式」「短答式」の設問は、「選択式」の設問と比較して、大阪府との比較で得点率が低い。

■特徴的な傾向と対策

- ・観光と環境保全の両立がはかられている世界自然遺産に登録されたオホーツク海をのぞむ半島の名前（知床半島）を書く設問では、全設問中2番目に正答率が低く（21.1%）、大阪府（33.2%）との開きが最も大きい。地理的な理解と現代社会における課題などを関連づけながら知識の定着を図ることが求められる。
- ・「天下の台所」についての理解を問う設問では、全設問中2番目に正答率が高い（74.0%）が、大阪府（82.4%）と比較すると、その差は、全設問中で3番目に大きい。また、新鮮なうちに出荷するために、人口の集中する大都市の周りで野菜などをつくる農業の名前（近郊農業）を書く設問では、大阪府との差が全設問中2番目に大きい。基礎・基本となる用語の定着やその理解を丁寧に図ることがより一層求められる。

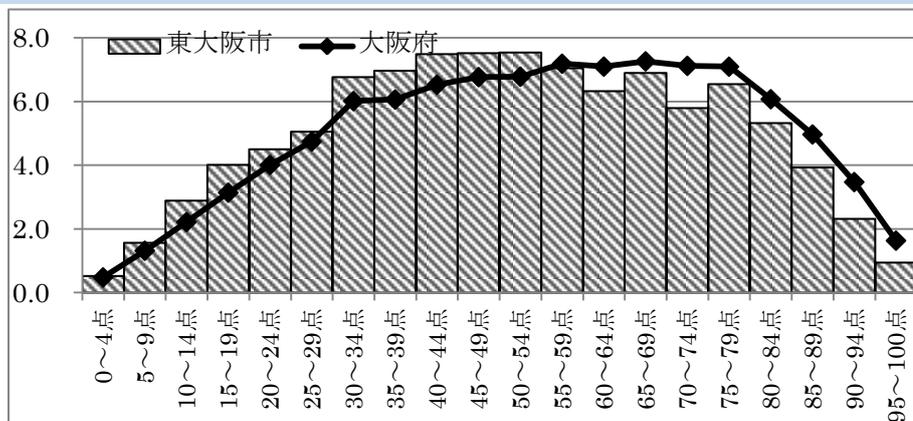
第2学年 数学

■平均得点

51.5 点 (東大阪市)

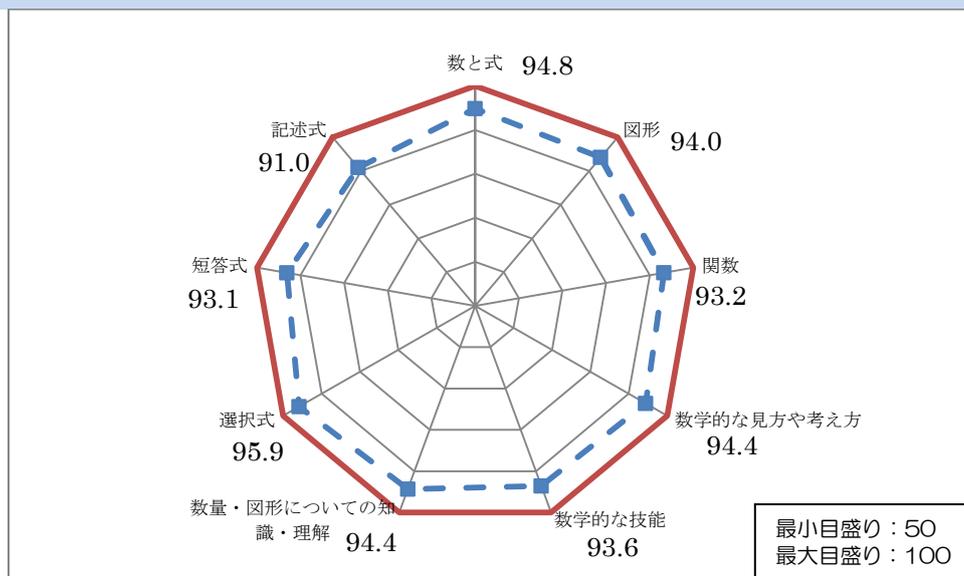
54.7 点 (大阪府)

■得点別分布の割合



- ・40点～54点を中心とする台形の分布となっている。
- ・府の分布と比較して60点以上の生徒の割合が少ない。

■領域別等の平均得点率のレーダーチャート (大阪府を100とした時の東大阪市の得点率)



- ・「数と式」「図形」「関数」のいずれの領域においても大阪府との比較において得点率にやや差が見られる。
- ・設問形式別では、「選択式」の設問が「記述式」「短答式」の設問と比較して、大阪府との差が小さい。

■特徴的な傾向と対策

- ・「 y が x の一次関数で グラフが点 $(1, 6)$ を通り 切片が 1 のとき y を x の式で表す」設問では、全設問中、大阪府との開きが最も大きい (東大阪市 44.2% 大阪府 50.9%)。一次関数の最も基本的な設問であり、授業での反復による定着や家庭学習の内容を工夫することなどが求められる。
- ・「上底 a m, 下底 b m, 高さ h m, 面積 10 m^2 の台形において 高さ h について解く」設問では、全設問中最も正答率が低い (東大阪市 17.0% 大阪府 21.5%)。具体的な場面で、数量を表す式や関係を表す式を目的に応じて変形することに大きな課題がある。レーダーチャートからも、関数の領域において最も大阪府との開きがあり、基礎基本の定着とともに、活用力を図る授業づくりが求められる。

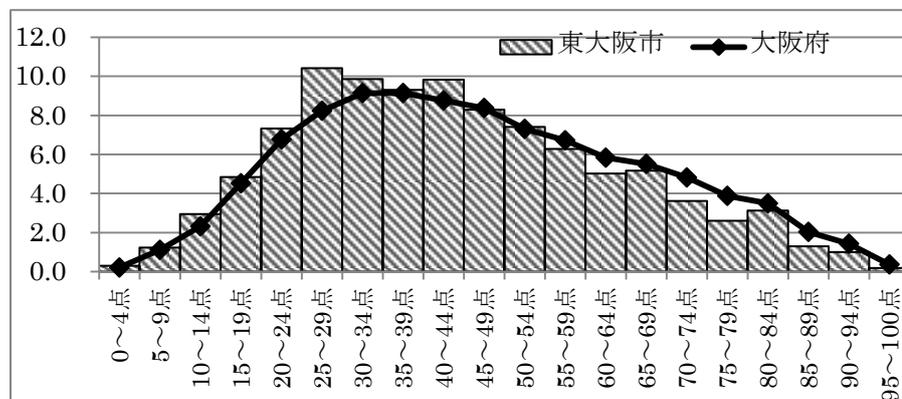
第2学年 理科A

■平均得点

43.7点 (東大阪市)

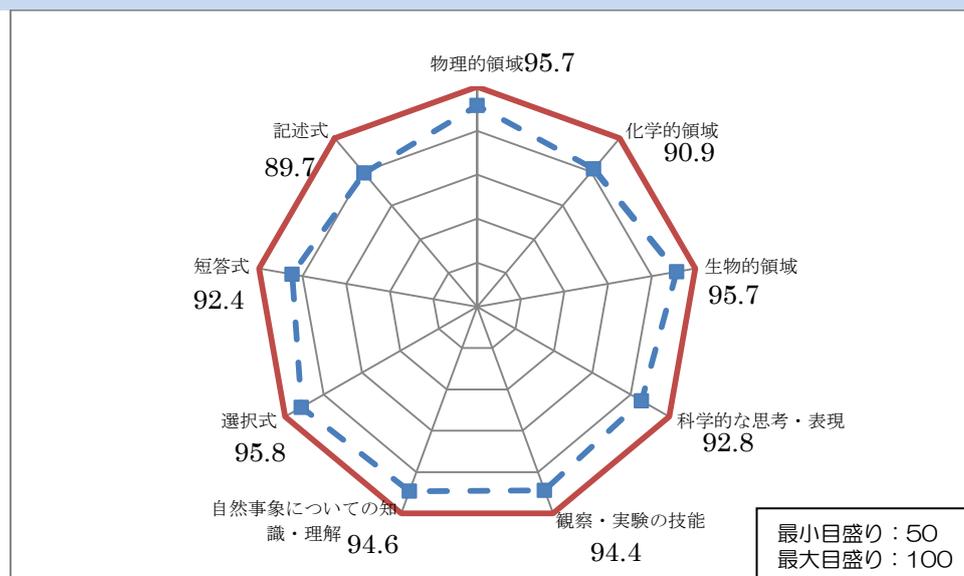
46.5点 (大阪府)

■得点別分布の割合



- ・25点～29点をピークとして、左寄りの山型となっている。
- ・府の分布と比較して、60点以上の生徒の割合が少ない。

■領域別等の平均得点率のレーダーチャート (大阪府を100とした時の東大阪市の得点率)



- ・「物理的領域」「化学的領域」「生物的領域」を比較すると、「化学的領域」での得点率が、大阪府との比較で低い値となっている。
- ・観点別では、「科学的な思考・表現」において、大阪府との比較で最も差が大きい。

■特徴的な傾向と対策

- ・「酸化銅と炭素粉末をよく混ぜ合わせる理由を選ぶ」設問は、全設問中で、大阪府との差が最も大きい (東大阪市 55.3% 大阪府 60.8%)。十分に反応させるために酸化銅と炭素粉末をよく混ぜ合わせるという技能を身に付けているかどうかを問う設問であり、実験や観察を効果的に取り入れ、知識だけでなく、実際に行うことでその理解をより一層確かなものとする工夫が求められる。
- ・「実験結果の表を読みとり、発生した気体の質量を求める」設問は、全設問中最も正答率が低い (東大阪市 6.4% 大阪府 7.7%)。実験結果から、発生する気体の質量を求める方法を理解しているかどうかを問う設問であり、必要な知識を身につけ、実験結果から考察し結論を導き出すなどの経験が重要である。

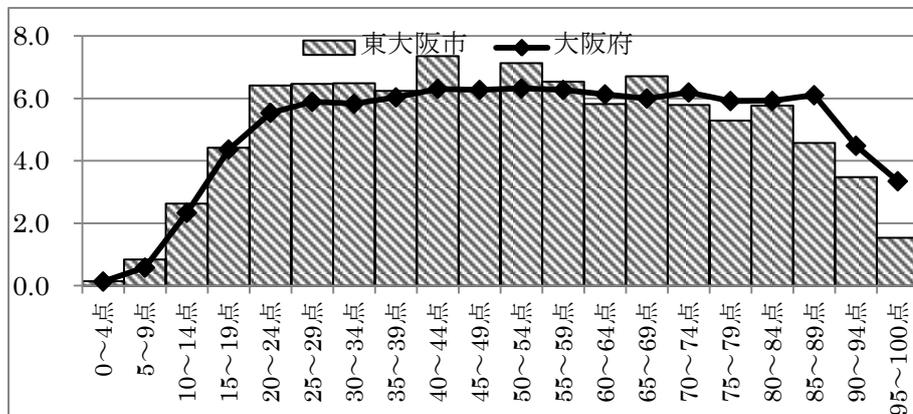
第2学年 英語

■平均得点

52.0 点 (東大阪市)

54.8 点 (大阪府)

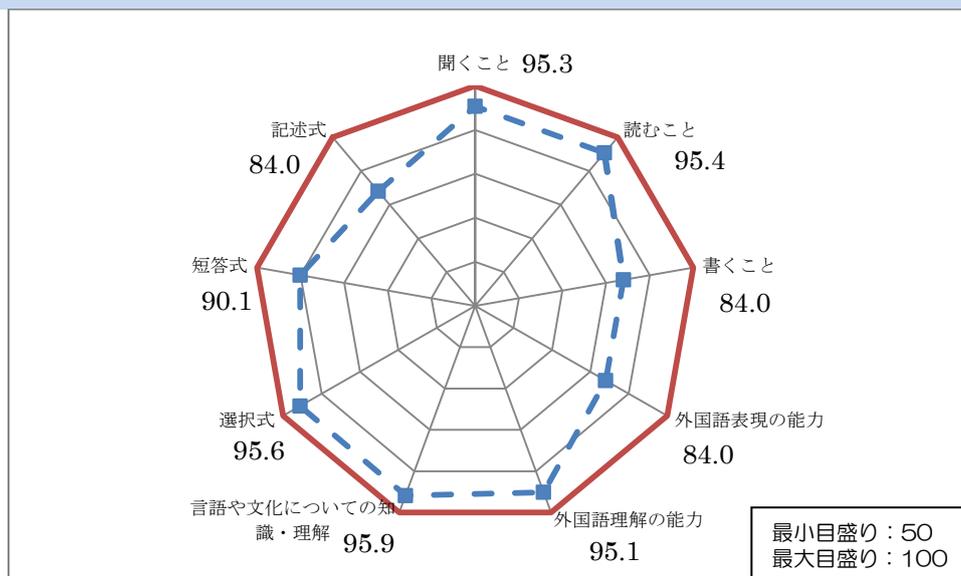
■得点別分布の割合



・40点～44点をピークとする台形の分布となっている。

・府との分布と比較して、75点以上の生徒の割合が少ない。

■領域別等の平均得点率のレーダーチャート (大阪府を100とした時の東大阪市の得点率)



・「書くこと」「外国語表現の能力」において大阪府と比較すると大きな開きがある。

・「聞くこと」「読むこと」においては、大阪府との比較において開きは小さい。

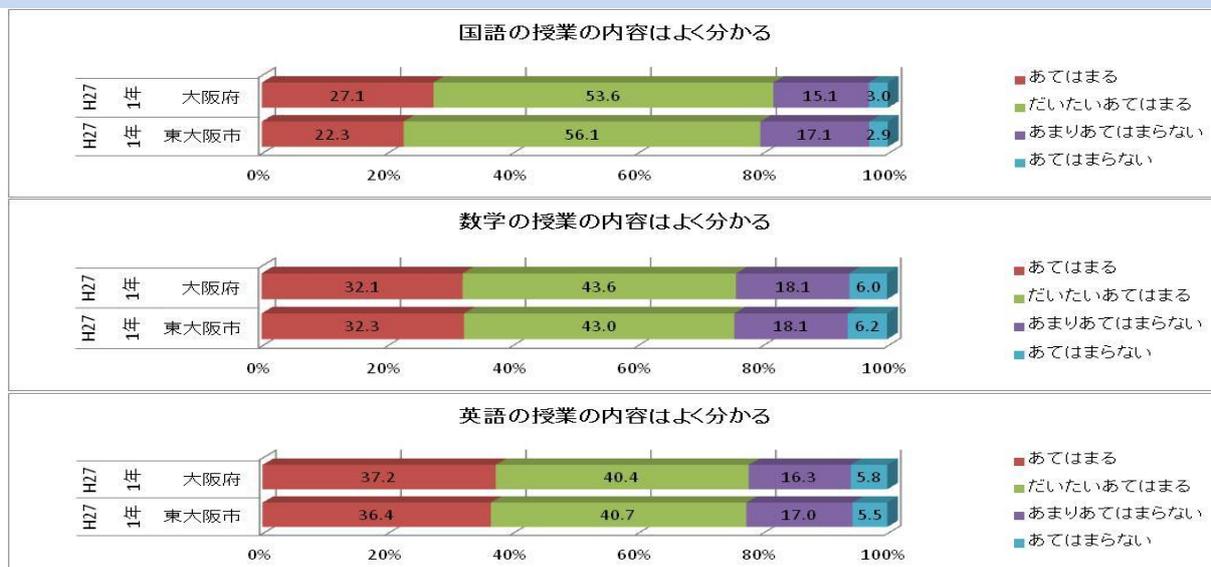
■特徴的な傾向と対策

・「鉛筆を使ってもいいかと聞かれた時の適切な答えを選ぶ」設問では、全設問中大阪府との開きが最も大きい (東大阪市 31.2% 大阪府 37.2%)。短い会話を聞き、応答文として適切なものを選択することができるかどうかを問う設問であり、外国語を使っての表現力が求められる。聞き取りについては、一定の力が定着しており、さらに、適切に表現する力を身に着けるための授業の工夫が求められる。

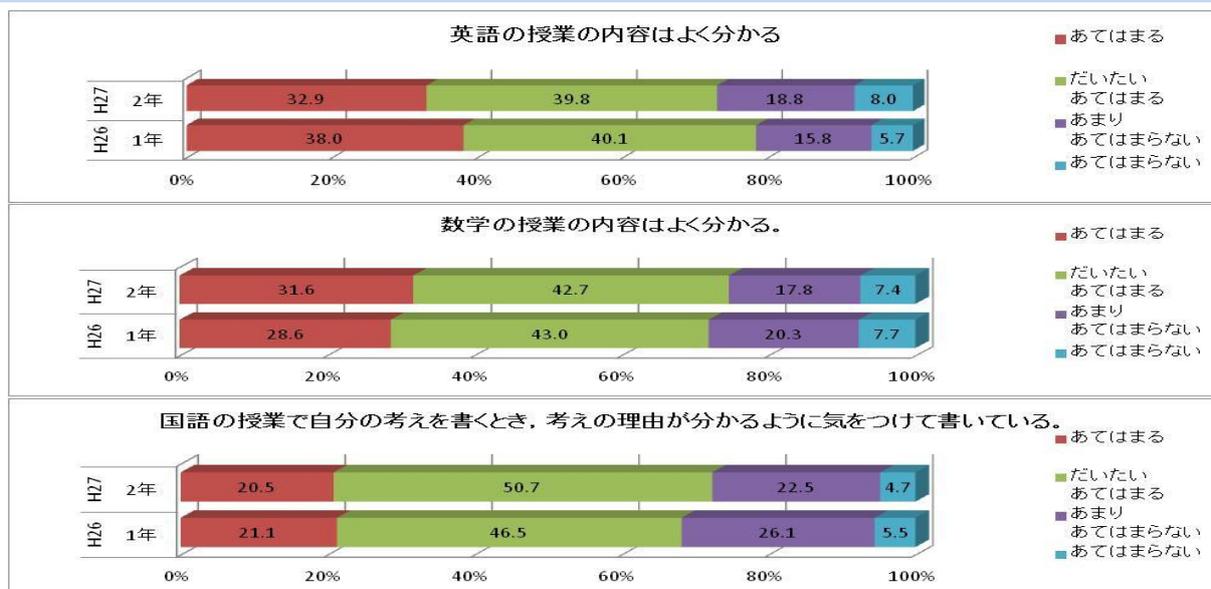
・会話文の内容を読み取り、適切な名詞 (number) を書く設問は、全設問中で最も正答率が低い。(東大阪市 6.8% 大阪府 10.1%) 会話文を読み、会話の流れや内容を理解しているかどうかを問う同様の設問でも、大阪府との開きが比較的大きく、多様な場面や表現を用いる授業の工夫が求められる。

アンケート結果

■中学校1年生



■中学校2年生【同一集団の昨年度からの変化】



■特徴的な傾向と対策

- ・1年生では、「数学・英語の授業内容が分かる」と回答した生徒の割合は、大阪府とほぼ同じであるが、「国語の授業内容が分かる」と回答した生徒の割合は、やや少ない。
- ・2年生では、「数学の授業内容が分かる」「考えの理由が分かるように気をつける」と回答した生徒の割合は、1年生時と比較して増加しているが、「英語の授業内容が分かる」と回答した生徒の割合は大きく減少している。
- ・アクティブラーニング等を意識した授業改善が進む一方、学習内容が難しくなる2年生時での一人ひとりに応じた指導の工夫や家庭学習習慣定着の工夫が求められる。